

平成25年度中山間農業研究所 試験研究成果検討会 開催要領

1 目的

平成24年度の試験研究結果について、生産者並びに関係機関の皆様にご担当研究員自らが発表し、成果を周知いただくとともに、今後の研究の推進に向けた意見交換を行う。

2 日時 平成25年2月15日（金） 13時30分～

3 場所 高山市上岡本町7丁目468番地 飛騨総合庁舎 3階大会議室

3 内容 本年度研究課題の成果についての検討

4 日程

13:30	開会
13:30～13:45	挨拶
13:45～14:50	成果発表（4課題）
14:50～15:00	休憩
15:00～15:50	成果発表（3課題）
15:50～16:00	速報の紹介
16:00	閉会

・課題名および発表順は別紙1のとおりです。

5 出席報告 出席者を（別紙2）により2月8日（金）までに
FAX または電子メールにてお知らせ願います。

FAX : 0577-73-2751 Eメール : c24402@pref.gifu.lg.jp

所属	中山間農業研究所
担当者	袖垣
電話	0577-73-2029
fax	0577-73-2751
E-mai	c24402@pref.gifu.lg.jp

(別紙1) 平成24年度中山間農業研究所試験研究成果検討会 発表順及び要旨

1. 13:45~14:00 (宮本善秋 主任専門研究員)

【課題名】モモ新品種「飛系モモ1号」の育成と特性

「飛系モモ1号(仮名)」は、平成10年に「川中島白桃」に「やまなし白鳳」を交配して育成したもので、現在は品種登録出願中である。収穫期が基幹品種の「白鳳」と「昭和白桃」の中間時期であるため、両品種の出荷端境期を埋めることができる。玉揃いがよく着色良好で、糖度が高く食味良好である。また、核割れ果、生理落果、ミツ症果などの障害果の発生も少ないことから、今後現地への急速な普及が見込まれる。

2. 14:00~14:20 (川瀬あゆ子 研究員)

【課題名】宿儺かぼちゃの摘心栽培及び貯蔵期間と食味

地這5本仕立て栽培において1株3果の収穫を目標とした場合に、着果節の先に残すべき葉数と収量・品質の関係を調査した。その結果着果節の先に8~10枚の葉を残すことで慣行(放任栽培)並みの品質・収量が得られることがわかった。また、慣行で5~7日間キュアリングしてから出荷されるが、この期間について最適な日数を検討するため20~60日間のキュアリングを行い食味と糖含量の変化について調査した。

【課題名】夏秋どりブロッコリーの品種及びネット被覆栽培の考察

ピクセル・トップギア・グリーンパラソルの3品種を4~7月の1ヶ月ごとに段播きし、品種ごとの播種適期を調査した。4、5月播種の場合、品質の面でピクセルが最も適しており、7月播種ではいずれの品種も適していた。一方6月播種の場合、今回の3品種では可販品質が得られず不適であったため、他品種の検討が必要である。また、ネット栽培の検討を行ったが、防虫効果は高いものの品質が劣るため適していないことがわかった。

【課題名】グリーンピースの連作障害回避のための独立袋栽培

連作障害対策として独立袋栽培(仮称)技術のグリーンピースへの適応性を検討した。培地量、施肥量の検討を行った結果、培地量5L、施肥量が慣行の2割減である少肥区で慣行と最も近い収量が得られた。そのため独立袋栽培技術はグリーンピースにも応用できる可能性があると思われるが、培地量、施肥量については今後の検討が必要である。

3. 14:20~14:35 (二村章雄 専門研究員)

【課題名】トマト葉先枯れ症の発生と軽減対策

5月下旬定植の作型において、基肥に含まれる16kg/10aの加里に加え、6月中旬頃から8月下旬まで、加里として0.3kg/10a相当量の溶解した硫酸加里を毎日施用した(加里施肥量としては、基肥16kg/10a+追肥24kg/10aの40kg/10a程度)。その結果、追肥の加里無施用に対し、葉先枯れ症を呈する葉数が減少したことから、着果負担の高い時期を迎える前からカリの追肥を行うことが効果的と考えられた。

4. 14:35~14:50 (中西文信 専門研究員)

【課題名】セルトレイを用いたハウレンソウ栽培の今後の展開

農地が被災し、土砂流入等でほ場に作付けできないような状況を想定し、セルトレイを用いたハウレンソウの隔離栽培を試みた。限られた培地量においても最低限の生育は確保できることが確認できた。また、隔離栽培を育苗技術に応用し、セル苗の移植栽培を試みた。直播栽培と比較し在圃期間を短縮することができ、年間作付け回数の増加による生産量の向上も可能であると考えられた。

休憩(10分)

5. 15:00~15:15 (前田 健 主任研究員)

【課題名】 輪ギク「飛驒黄金」の露地直挿し栽培の検証

雨よけ栽培では広く行われている直挿し栽培を露地栽培でも応用可能かを検証した。挿し芽後の被覆ポリフィルムは有孔、無孔どちらでも挿し芽の活着は良好で、その後の生育もほぼ同等であったが、慣行のセル苗定植と比較すると草丈が低かった。また、4月13日以前に直挿しを行えば盆需要期出荷が可能であると考えられた。

6. 15:15~15:30 (久田浩志 主任専門研究員)

【課題名】 水稻主要品種の作期後退 (第二報)

飛驒地域の水稻主要品種である「コシヒカリ」と「たかやまもち」について、来るべき高温登熟への対策を想定し、移植時期を遅らせた場合の収量及び玄米の品質を調査した。5月中旬を基準とし6月中旬まで段階的に移植時期を遅らせたところ、「たかやまもち」では移植時期を遅らせると収量、玄米の品質とも低下することが多かったが、「コシヒカリ」では、収量の低下がわずかであり、玄米の品質が向上する事例も多く見られた。

7. 15:30~15:50 (前田 健 主任研究員)

【帰朝報告】 国際園芸博覧会「フロリアード2012」の花飾りとオランダのキク生産

オランダで行われた国際園芸博覧会「フロリアード 2012」に短期実務研修生として日本国政府出展の運営サポートを行ったので、その展示内容について、また現地で視察したキクの生産状況について報告する。

